銀星少年

夏目真七

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
銀星少年

【Ｎコード】
Ｎ９３９３Ｍ

【作者名】
夏目真七

【あらすじ】
架空の少年とアネモネ

夜が深まり、僕は愛用の鞄を持って駅に向かった。
パール光の街灯を潜り抜け、時折吹く冷たい風にマフラーを掴む。
深海のようなソーダ水瓶、鉱石燈、、砂糖菓子の袋、ドロップ。
これらを売店で買い揃え、切符を買って駅の冷たくなったベンチにそっと腰掛ける。
そしてさっそくソーダ水の瓶を開けにかかった。

線路の向かいにある草原には、綺麗な花が一面に咲き誇っていた。
この時期になると、誰かが植えたのか、アネモネの花が一斉に開く。
だが普段は荒地で、人の影も見えないような場所だった。
それが夜の暗闇の中で、白く光っているようだ

―あの花を採って、また戻ってきてみせようか。
―いや、もう遠ざかってしまったよ。

最近読んだ本で、こんなやりとりがあったのを思い出した。
あれはリンドウだったけれど、ぼんやりと浮かび上がる雰囲気は似ている。
ふと立ち上がろうとしたとき、丁度アナウンスがホームに響いた。

ぷしゅーーー

黒服の男が降りてきて、僕の前に小さな紙袋を差し出した。
そして、花を一輪僕の髪に差し、無言で立ち去った。
袋を覗こうとしたら、花の粉が砂金のように煌きながら落ちた。

中身は大きな胡桃の化石と、良い香りのするパンの包み、そして黒曜石に蛍石を埋めこんだ羅針盤と、ペアの天星図だった。
僕はそれを鞄にいれ、空になった瓶を持って列車に乗り込んだ。
中は閑静としていて客もいない。
窓際に座ると、さっきの一面の花が風に揺れ、花びらが舞った。

瓶を窓枠に置き、

頭に飾られた花を一輪挿してみた。
別れを惜しむかのように、静かに花の光が儚い音を奏でるように落ちる。

汽笛が鳴った。

次に、この花畑を目にする時は、また誰かが、あのベンチに座っているのだろうか・・・。

（後書き）

銀河鉄道のとある停車駅の目の前にはアネモネが咲き誇っているらしい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9393m/

銀星少年

2010年10月28日08時07分発行